たんぱく質で急性肺障害抑制

肺がん治療薬「イレッサ」（一般名・ゲフィチニブ）や、輸血などの副作用で起こる急性肺障害を抑制する新療法を、京都大学などが開発した。動物実験で効果を確認。来年夏にも患者に投与して効果を検証したい考えだ。

京大ウイルス研究所の淀井淳司教授と京大病院の中村肇助教授、バイオベンチャーのレドックス・バイオサイエンスなどが開発した。生体内の「チオレドキシン」というたんぱく質を静脈に投与する。チオレドキシンは肝障害や糖尿病にも効果があることが動物実験で分かっているが、人間に投与する計画は初めて。

急性肺障害などは白血球の一種「好中球」が血管から漏れて炎症を起こす。国内では双方合わせて年間約五万人が発症し、半分程度が死亡する。